

る「包摂」概念」／相澤真一（中京大学）「高校教育機会の提供構造の全国的成立とそのゆくえ」

第10回 2013年11月21日（参加者22名）寺尾範野（名古屋外国語大学）「イギリスにおける社会学と福祉国家思想の交錯」／生源寺真一（名古屋大学）「変わる農業、変わらぬ農業」

第11回 2014年5月15日（参加者22名）川島佑介（名古屋大学）「中央政府の選択、地方自治体の選択」／田村哲樹（名古屋大学）「熟議・参加・自由民主主義」

第12回 2014年10月31日（参加者18名）大岡頼光（中京大学）"Sweden's Welfare and Education Budget System"／Sven E. O. Hort（ソウル大学）"From the First to the New Asian Welfare States"

第13回 2015年5月21日（参加者26名）荒見玲子（名古屋大学）「要介護認定が市民に付与する政治的効果」／小峯敦（龍谷大学）"Keynes and Women's Degree in 1920/21"

第14回 2015年11月20日（参加者21名）吉野裕介（中京大学）「これからの「リベラル」を定位する」／筒井淳也（立命館大学）「リベラリズムと親密性の正当化」

文献

上村泰裕, 2011, 「社会政治研究会について」『東海社会学会年報』第3号.

中根多恵, 2009, 「社会政治研究会」『名古屋大学社会学会会報』第10号.

不老会研究会

名古屋大学大学院環境学研究科博士後期課程

王 昊凡（おう こうはん）

不老会は、社会学講座の先輩方から受け継がれた院生の研究会である。筆者が知る限りこれまで、社会理論に関する読書会や新古典の「再訪」、方法論研究会など様々なテーマが掲げられてきた。

今年度の不老会は、院生の研究報告会と読書会を平行して行うこととなっている。11月末現在までに四回の研究会を行っており、年度じゅうに少なくともあと二回開催される予定である。以下、既に行われた四回の概要について記しておく。

第一回目（4月29日開催）は学術振興会特別研究員申請者による報告が行われた。第二回目（5月31日開催）では博士前期課程1年を中心に、名古屋大学社会学講座に提出された修士論文の輪読を行った。筆者自身も経験したことだが、博士前期課程では2年（実質でいえば更に短く、おおよそ1.5年くらい）で修士論文を書かなければならず、時間的には余裕があるわけでは決していない。ゆえに早い段階で先輩方の修士論文を読むことで、在籍

者の研究がより円滑に進むよう企画されたものである。第三回（6月22日開催）では、東海社会学会大会のプレ報告会を行った。こちらは半ば恒例となった企画である。

第四回（11月24日開催）では、博士論文構想検討会を行った。博士論文を書く予定の院生が定期的に報告することで、互いの進捗を「監視」しあうのである。この回では研究報告に加え、ゲスト講師として博士論文を提出された先輩をお招きし、執筆のスケジュールや執筆期間の生活などについてお話を伺った。筆者自身にとってもたいへん有意義なアドバイスを頂くことができ、感謝申し上げます。なお、以前より名古屋大学教育発達科学研究科教育社会学の大学院生にも参加していただいている。互いにとって普段とは異なる知的刺激が得られる機会となっている。

こうしてみると、文献の輪読を同時並行で行うはずだったが、結果的に今年度の不老会は研究報告が中心となってしまった。社会学の新しい研究動向を知り、古典・新古典を読み返すことは当然重要であるが、昨今大学院生が置かれた状況をふまえると、本研究会の互助組織としての重要性が増してきたといえよう。今後は、『再配分か承認か』（ナンシー・フレイザー&アクセル・ホネット著、2004=2012）の読書会と、次年度の学術振興会特別研究員申請者による報告などを予定している。

IV 博士論文をふりかえって

博士号取得までを振り返って

椋山女学園大学文化情報学部講師

木田勇輔

2014年12月に博士号を取得し、2015年4月より椋山女学園大学文化情報学部にて勤務している。社会学分野で専任教員のポストを得ることは昨今容易ではなく、そのような中で私が職を得ることができたのは、率直に言って幸運だったからとしか言いようがない。もちろん、学部4年時からご指導をいただいている黒田由彦先生をはじめ、これまで多くの方々から様々な形で支えていただいたということも忘れてはならないだろう。今回は私の体験が多少なりとも博士後期課程に在学する大学院生諸氏の参考になればという思いから、筆を取ることにした。

最初に私と社会学の出会いについて。私は2003年に名古屋大学情報文化学部社会システム情報学科に入学したのだが、大学入学時には漠然と情報化社会のあり方に関心を持っていたのだと思う。学部2年次に板倉達文先生の講義を受け、社会学という学問の存在を知って大きな魅力を感じたため、3年次に社会学と地理学で構成される社会地域環境系に進学